にいがた平和スクール

平和記念公園版

8月5～7日、広島での平和研修で中学生が学んできたことを新聞にまとめました。

【記者】
鳥屋野中　木浦　咲良
附属新潟中　山本麟太郎
附属新潟中　江口　弘幸
高志中　鈴木　結菜
曽野木中　関口未来莉
新潟柳都中　本保　奏葉

2019年
10月1日
新潟市総務部総務課

平和記念公園

原爆の子の像

1つ目は原爆の子についてです。この像は禎子さんという少女をきっかけに造られたものです。禎子さんは2歳で被爆するも元気な少女でした。しかし、被爆から9年後、6年生の秋に入院。千羽鶴を折ると治ると聞いた禎子さんはそれを折り続けるも、叶わず亡くなりました。この話を聞いた同級生らを中心に話が広まり、慰霊の像であるこの像ができました。

この像には今でも毎年10tもの折り鶴が供えられています。その鶴は再生され、卒業証書として利用されたり、この話事体も各国へ広まっています。

この話を聞いて私はこの像はただの像ではなく、広島の歴史を語る上で欠かせない、特別な意味を持つものなんだと感じました。被害を受けた人々を癒し、原爆の悲惨さを今も伝えているこの像の勇姿を現地で見れてよかったと思います。

平和の鐘

2つ目は、平和の鐘です。平和の鐘は、広島の悲願に立って、全ての核兵器と戦争のない平和共存の世界を達成することを目指し、その精神文化運動のシンボルとして造られた物です。そして、平和の鐘の音は広島から世界の全人類の一人一人の心にしみわたってほしいと願われています。

同じグループの人と鳴らした平和の鐘の音は、平和の鐘に書いてある国境のない世界、平和な世界を本当につくれそうな胸に響く素敵な音でした。その周りに生えているハスの葉も、被爆当時にハスの葉で傷を覆い、火傷の痛みをしのいだ被爆者の霊を慰めたものだそうです。ハスの葉で痛みをしのがなければいけない悲惨な状況だったと思うと胸が痛みました。

平和の鐘はこれからもいろいろな人に鐘の音を届けると思います。そして、その音を聞く全ての人が平和や戦争について考えてほしいと思います。

原爆死没者慰霊碑

3つ目は、原爆死没者慰霊碑です。この慰霊碑には、様々な工夫があるということを学びました。

まずは、像の形についてです。像がアーチ型になっているのは、原爆犠牲者の霊を雨から守るためということだと知りました。また、広場、慰霊碑、原爆ドームが一本の直線で結ばれるデザインになっていると分かりました。私は、この像の形にはたくさんの意味がこめられていると思いました。

次は、碑文についてです。慰霊碑には、「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」と書かれた碑文が刻まれています。これには、亡くなった人の冥福を祈り、過ちを犯さないという意味があると話を聞いてはじめて分かりました。

このように、慰霊碑には亡くなった人々への思いや平和への願いがこめられているということを学びました。

原爆ドーム

4つ目は原爆ドームです。被爆する前は、「広島県産業奨励館」という名前でした。原爆は、建物の東側、約150m、上空約600mのところで炸裂しました。

この建物はヤン・レッツェルというチェコ人の建築家が設計したものをもとに建設されました。被爆時のドームは金属が溶け、1秒以内に3階建ての本体部分がほぼ全壊したようです。私は被爆前と後の差を知り、たった一撃、一瞬でこんなにも姿が変わってしまうのかと、とても衝撃を受けました。

今では負の世界遺産となり、多くの人が観光としてやってきています。どんなかたちだとしても、この悲惨な姿、過去を忘れてはいけないと私は思います。原爆の恐ろしさを物語っている原爆ドーム。このような悲劇が二度とおきないことを願い、伝えていきたいと思います。

原爆被害者の証言

8月6日（火）、「原爆被害者証言のつどい」に参加しました。新潟市の中学生がグループに分かれそれぞれ伺った証言をレポートします。

○証言レポート

本保幸雄さんは、被爆当時14歳の中学2年生で、学徒出陣によって工場に動員されていました。外で作業をし終わり、工場に入ろうとした時に被爆したそうです。当時は外で作業をしている人もたくさんいました。

原爆が落とされた瞬間、爆風を受け工場の奥の壁に強く打ちつけられそのまま気絶してしまったそうです。そのあと目が覚め辺りを見わたすと、ガレキばかりで何もなく、血だらけの人々を目にしました。水を求める人や死体だらけの川や橋など、この世とは思えない光景が広がり、何が起こったのか分からなかったそうです。

本保さんは「このようなことを二度と起こしてはいけない」と強く語ってくれました。決して忘れてはいけないこの出来事を私たち若い世代が伝えていかなければならないと思いました。

○証言レポート

1945年8月6日、広島はその夏一番の暑い朝で、雲一つない穏やかな空でした。しかし、午前8時15分、「ピカッ」という光とともに、それまで真っ青だった空は暗黒と化しました。あちらこちらで「水をくれ」「水をくれ」と叫ぶ人がいたこと、目は飛び出し、皮膚はまるで振袖のように垂れ下がり、体には無数のガラスの破片が刺さっている人、それはこの世の光景じゃない、まるで地獄のようだった。被爆者である本保幸雄さんはその日の広島の光景を力強く語ってくれました。

僕はこのような悲惨な過去を悲惨な過去のままにしないよう当たり前にくる今に感謝し、今回の経験を次の世代に伝えていけるように努力していこうと思います。

事業に参加しての感想

私はこの研修で何人もの人から戦争についての話をききました。そこに共通してたのは、「二度と戦争を起こしてはいけない」ということです。このことを語りついでいくためにまずは身近な家族や友人に伝え、世界平和・核兵器ゼロに一歩でも近づけたらいいなと思いました。

（木浦　咲良）

僕は、被爆者の方から原爆投下時の惨状や、今もなお、放射能の後遺症に苦しんでいる人がいるという事実を聞き、もう二度とこのような過ちを繰り返さないよう、今回の経験を身近な人々に伝え、「相手を思いやる気持ち」を大切にして行動していこうと思いました。

（山本　麟太郎）

僕が広島で聞いた話と、新潟での平和祈念献花式に参加して感じたことは、多くの悲惨なことがあって今が平和になっているということです。たとえその後が平和になっても戦争は必ず犠牲者を出します。なので、二度と戦争はおこしてはいけないということを、僕は周りに発信していこうと思いました。

（江口　弘幸）

私はこの研修で、原爆の恐ろしさや平和を願う人々の思いを感じることができました。そして、原爆の悲惨さを忘れないでほしいという被爆体験者の願いを、伝えていかなければならないと思いました。今後、世界を平和にしていくために、原爆についてより深く理解し、3日間で感じたことを身近な人に伝えていきたいです。

（鈴木　結菜）

私が、事業に参加して思ったことは、実際に見たり、体験すると、印象や感じ方が全然異なるということがわかりました。

証言なども、現地に行って、経験を聞かせていただくことで、重みを感じることができたと思います。

（関口　未来莉）

私は8月5日から7日まで広島へ行き、その3日で原爆や、平和のありがたさ、大切さを今までにないくらい深く考えました。特に平和記念資料館がすごく印象的で、被爆当時の写真や模型を見て、原爆は兵器として使ってはならない、とても大変でつらかっただろうと思い考えた3日間になりました。そして原爆というできごとを忘れないため、たくさんの人に伝えていきたいと思いました。

（本保　奏葉）